



## 第25回安城学園報告討論会

日時：2024年6月8日(土)（追加開催：7月23日、8月22日、9月2日）  
場所：愛知学泉大学・愛知学泉短期大学 岡崎学舎

### ■ 報告討論会 基調講演 ■

## 「人間とAIがともに学び・ともに働き・ともに生きる時代が来た！」

学校法人安城学園 学園長 寺部 暁



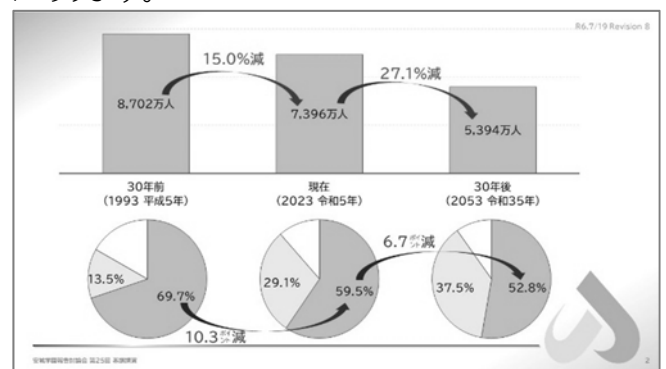
今回は、25回目の学園の報告討論会ということで、テーマは「人間とAIがともに学び・ともに働き・ともに生きる時代が来た！」ということでお話したいと思います。ただ、これについては今回が初めてではなく、昨年度も行いました。昨年度はリーディングスキルについて講演いただきましたが、それは学生や生徒、園児といった子供たちが対象でした。しかし、今回は大人が対象となります。

もう1つは学校法人安城学園が幼稚園から大学、短大を含め、自学・共学システム「学びの泉」の本格的な開発を進め、今年は3年目であります。そういう中で、もっと加速させる必要があると感じ、加速させるツールとしてAIを活用して欲しいと考えています。

また、今回は生成AIとのワークスタイル、ライフスタイルとありますけれど、働き方改革はまだ口だけの世界で進展が遅れていると感じています。ただ、そういう意識で取り組んでいただけていると思います。そして、私の立場から言うと、働き方改革だけではなく「働かせ方改革」の両方が必要だと思っています。今回の分科会がそのために役立つことを期待しています。

さらに、「学びの泉」という自学・共学システムについては、それが授業や講義だけでなく、いわゆる第1ステージが一番大事なのですが、第2ステージも学生や子供たちにとって大切な成長の場であり、学校の中だけでなく地域（第3ステージ）も成長、発展する場でもあります。そして第4ステージもあります。「学校防災アップデート」は第1ステージではなく、第2ステージや第3ステージにおける「学びの泉」、そういう取り組みと位置付けをしております。

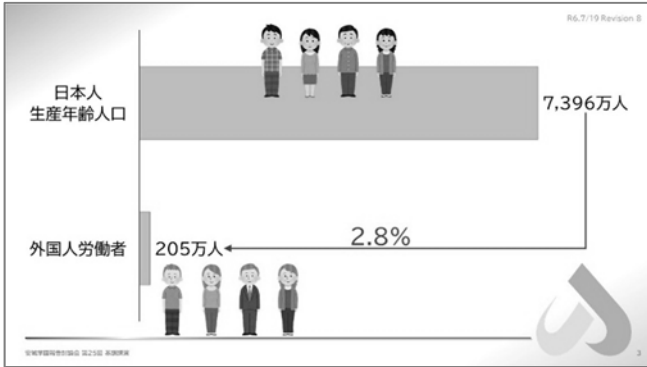
さて、このグラフを見ていただくと、生産年齢人口（15歳から65歳未満）の人数が減少していることがわかります。政府は現在、この年齢層を70歳まで拡大する方針ですが、この動向を見る限り、減少傾向にあります。



これに対して高齢者の割合は増加しており、若い世代（15歳未満）は比率が低下しています。この現実には理解されていると思いますが、これが私たちの直面する現実です。この現実を受けて、今は教育の世界だけでなく、色んな世界で人手不足が問題となっています。

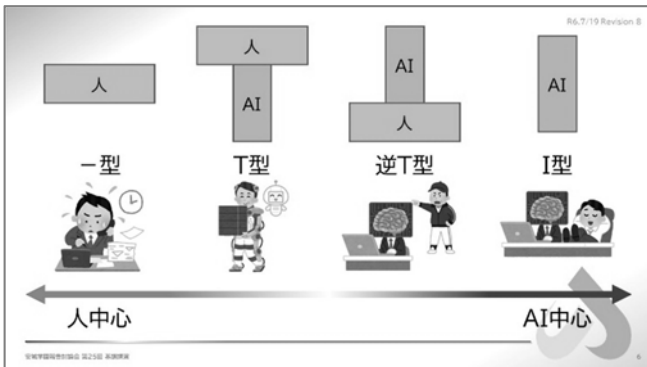
次に、今は日本人の労働者に焦点を当てましたが、今度は外国人労働者について。特定技能の導入により、外国人労働者は増加していますが、まだまだ課

題が残っています。こうした状況を踏まえると、(外国人労働者は)あまり当てにならないと考えております。



そして、ロボット技術については、介護ロボットや調理ロボットなどの進化が進んでいて、今後もその技術はますます発展することでしょう。

昨年度、AIが普及すると人間の仕事がなくなるのではないかという懸念もある中、AIとの共存を模索してほしい、「with AI」だとお話しました。今回のテーマはこれをさらに進め、「学びの泉」の開発においても「with AI」、そういう意味でとらえていただきたいと思います。



そこで、図のとおり3つのタイプがありますので、I型と逆T型の間に一本線を引いてください。先ほど日本人について話しましたが、これらの3つの働き方タイプについても触れたいと思います。一番右は完全にAIが担当し、人間の判断が不要な仕事です。実際の労働はAIが行います。

これまで、一型(人間だけ)の働き方が主流でした。これはすべて人間同士が中心で、AIを使わずにおこなってきました。しかし、これが量的に減少していることは明らかです。今後、私たちの働き方は一型からT型へと変わっていくでしょう。T型とは、人間が中心で、AIがアシスタントとして働くことで成果を上げる働き方です。逆T型もあります。これは、例えばAI管理栄養士というアプリがあり、実際の高齢者クライアントにAIアプリを導入し、様々なデータを収集します。しかし最終的には、リアルな管理栄養士がスーパーバイザーとして支援する必要があります。ここでも専門性が求められています。

教育や他の分野でも、人中心の働き方からT型や逆T型へのシフトが進んでいきます。これが将来の教育や人材育成の方向性になると考えていますが、人間が大切なことは変わりません。人とAIがどのよう

に分業していくといいのか、そのマネジメントが重要になるという話です。これは非常に重要であり、エンパワメントという言葉がありますが、Empowerment with Generative AI~生成AIによる能力向上~。今私たちが注目している生成AIは新しい形のAIであり、検索機能だけでなく生成機能も持っています。AIを活用することで、私たちの生産性が向上することが期待されます。

次の課題は、理系の人材育成に加えて、AIを活用する文系の人材育成も重要であることです。AIを使って何かを実現するためには、その技術を活用できる人材が必要です。この点において、今の日本の教育は理系のみ焦点を当てている傾向にあることに留意しています。

この点を踏まえ、今後は教育や研修でAIを活用した取り組みを進めていきたいと思えます。例えば、野口竜司さんの『文系AI人材になる:統計・プログラム知識は不要』という本を昨年度より輪読してもらっていますが、まずは一冊の本をしっかりと読むことが、大変重要だと思います。それに基づいて、AIを活用した教育や研修をしていくことが必要です。みなさんからも『こんな研修がしたい』と提案していただきたいと思えます。

今度は、この本を読んでいただくと、大まかに文系のAI人材というのはどんなものかということ、とりあえずAIを活用するためには、AIを理解する力、AIマインド、AI企画力、AIマネジメント力、そしてAIプロンプト力が必要だということです。詳細については、ぜひ本をご一読ください。

AIで特に重要なのは、マインドチェンジとアンラーンです。つまり、これからの時代はAIを活用することが当たり前。スマートフォンと同じように、AIも当たり前前に使い、活用して役立つことをしようとマインドチェンジすることです。

AIについては皆さんが既に学んでいるかもしれませんが、1年前の知識だけでは対応しきれないほど、技術は急速に進化しています。そのためには、固定観念を持つのではなく、アップデートも重要です。常に新しい情報を吸収し、使えるものは使い、使えないものは忘れるというアンラーンの姿勢が必要です。

ここまででAIの仕組み、例えばディープラーニングや機械学習、教師あり・なし学習などについて、文系レベルで理解していただく。特に大事なことは、野口氏の本の後半にある企業の活用事例を通じて、学校でのAIの活用方法を考えてみてほしいと思えます。

AIの企画力とは、簡単に言えば、昔からある5W1Hの考え方がAIでも役立つことです。それに加えて、AI操作力・導入力も重要です。詳細は本をご覧ください。

特に最後に、プロンプトですが、プロンプトとは、コンピューターに命令を与えることです。時にはプロン

プロンプトが明確でなかったために、AIの反応が悪い場合もあります。そのような場合には、単にAIが悪いわけではなく、私たちのAIを使う力が未熟であることも考えられます。プロンプトについても、これに基づいて指示を出せばAIをうまく活用できます。だから単に、何々はなんですかという単純な質問だけだと、AIの潜在能力を開発していないということでありませ

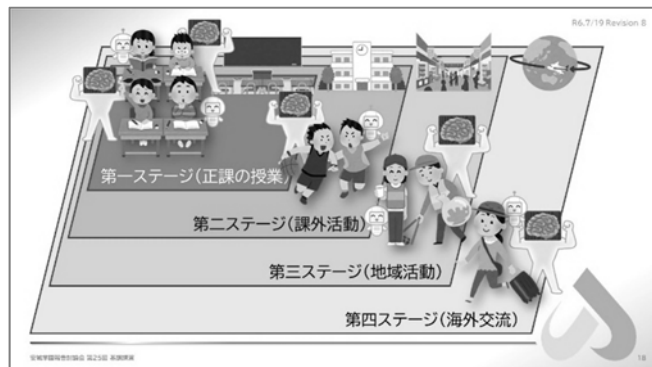


4月の学園だよりの挨拶文の表題を、「子どもの潜在能力を開発するのはあなたです。あなたの潜在能力を開発するのは子どもです。同じようにあなたの潜在能力を開発するのは生成AIです。生成AIの潜在能力を開発するのはあなたです。」としました。「人間とAIがともに学び、ともに働き、ともに生きる」ということであります。

従来、コンピューターとコミュニケーションするにはプログラミング言語が必要でしたが、現在では自然言語でのユーザーインターフェースが可能になり、プログラミング言語を学ばなくても操作できるようになりました。これにより、読む、書く、聞く、話すといった自然言語のスキルが重要になります。

また、対話する力には4つのタイプがあり、人間同士の対話、自分自身との対話、AIとの対話、そして話が通じにくい人との対話があります。これらの対話スキルがこれから必要だということでございます。

以上の内容は、第1ステージから第4ステージまでの全てのステージでの「学びの泉」にAIをアシスタントとして活用することで、学生が育つ環境を整えることができるという点で重要です。



今度は、文部科学省が生成AIを初等中等教育に導入についてパイロット校でやられています。安城学園高等学校や岡崎城西高等学校でも、このようなパイロット校に手を挙げることを検討したいと思います。

もう1つの例として、SoftBankが子供たち向けにAIチャレンジを展開しており、Z世代を含む文系AI人材の育成を図っています。こうした有意義な試みが行われているので、こういったことに第3の挑戦として挑戦して欲しいと思います。

次に、学校で学ぶ意義や教員が教える意義について複雑な問題が述べられていますが、自分たちがこれまで行ってきたことが無意味だというわけではなく、今後の意義を再確認する必要があるということです。例えば個別最適化ということで、とにかく個人の基礎学力上げるために、1対40でやっても変わりません。それでももうアプリを使う形になるのですが、でも生徒指導などは人間力が必要です。

学校の先生の役割は大きく生徒指導と学習指導があります。そういう意味で労働時間の問題だけでなく、教員としての働き方や事務職員としての働き方を含めて総合的に考える必要があります。

また、今回の話題は大人が文系AI人材になろうとするものでしたが、今後の社会ではAIを活用できる能力がますます求められるでしょう。そのためにも、幼稚園を含め、AI活用の能力を育成するためのカリキュラムなどについて、早急に進めていきましょう。大学、短大については既存学科のAI対応を早急に進めていき、大学は新学部、学科についても前向きに構想しています。高等学校でも新学科について考えていく必要があると考えています。

最後に、pisa型学力で一番大事なものは「課題」です。課題を「解決」するのに必要な知識や技術を「獲得」するのは、動画やAIでも学び、教えることができます。読む・書く・聞く・話す・考えるという基本的な能力を高めると動画で通常受けることができない学びも視聴し、学ぶことができる時代が実際にきつつあります。テキストばかりではなく、動画やAIを教育現場でアシスタントとして積極的に活用してほしいと思います。「学びの泉」の開発実践を加速させるためにも、生成AIを効果的に活用しましょう。そのことが皆さんの潜在能力も同時に引き出すこととなります。教育のいいところは、子どもだけにプラスではなく、自分にとってもプラスになることです。人間とAI、或いは人間とロボットが、ともに学び、ともに働き、ともに生きる、そういう学園を作りたいと思いますので、皆さんのご理解とご協力を賜りたいと思っております。

